委員会レポート

委員会活動として、
閉会中に行った所管事務調査の結果内容を、
各委員会は第５回定例会において、
次のとおり報告しました。

総務文教常任委員会

委員長　口田邦男

調査事項　図書館の管理・運営について

【本町の現状】

21年度末の蔵書数は、管内では2番目に多い176360冊で、昨年度の利用者数は延べ158339人、貸出冊数は511556冊であり、ピーク時の平成9年と比較すると、子どもの減少や図書購入費の削減等で、利用は半減している。

運営面では、子どもたちが本に親しめるように、読書サークルの協力で、毎月2回「お話会」を開催したり、移動図書館や移動文庫として、各小・中学校や、保育所・幼稚園などへの貸出しも行っている。

また、毎月テーマを決めて図書展示を行ったり、エントランスホールで絵画展等を開催するなど、利用促進のため工夫をしている。

帯広市図書館での視察調査

【帯広市図書館】

利用者は年間45～50万人、約100万冊を貸出している。館内ではくつろぎながら読書できるように、椅子を多く配置するなどの配慮が施されていた。

同図書館では、職員数を抑えて運営しており、これ以上経費を削減する場合は、休館日を増やす方法しかないが、新市長の公約で休館日を少なくする方針が示されており、今後検討することになっている。

また、幼い頃から本に親しんでもらうために、乳幼児への読み聞かせ推奨本リストを母子手帳の大きさに合わせて作成し、健診時に親に配布したり、小・中・高校生には読んでほしい本の簡単な解説をつけたリストの配布をするなど、成長に応じて、読書をしてもらえるように、様々な工夫した取組みが積極的に行われており、感銘を受けた。

産業厚生常任委員会

委員長　奥秋康子

調査事項　家畜排せつ物の処理状況と再利用について

本町には189戸の畜産農家があり、1年間に排出される家畜ふん尿の量は約58万トンとなっている。

家畜排せつ物法の制定に伴い、町内すべての畜産農家で平成12年度から畜産環境整備リース事業等を活用し、適正な管理ができるよう屋根付き堆肥舎等の整備が行われてきた。

家畜ふん尿の処理及び活用については、自家農地へ還元する自己完結型が一般的だが、一部では畑作農家の麦稈（かんぱつ）との交換や専門業者への販売も行われている。また、平成20年度に、農協が家畜排せつ物堆肥化施設を建設したことにより、ペレット肥料及び完熟堆肥肥料の原料にも活用がされている。

管理指導体制は、町・農協・普及センター等で構成している「家畜ふん尿適正管理指導チーム」が、年2回巡回して指導を行っているほか、隔年で十勝総合振興局と同チームが合同により、5戸程度の農家を訪問して、適正な管理のアドバイスや指導も行っている。

家畜排せつ物堆肥化施設の視察では、バイオマスの利活用と堆肥化の技術など生産の流れについて、説明を受けた。

堆肥化施設での現地調査

利用しているバイオマスの種類としては、牛糞（ぎゅうふん）、鶏糞、食品加工残渣（ざんさ）で、製造過程で使用するボイラー燃料には、農業用廃プラスチックを使用している。

同施設の設置目的としては、循環型農業の確立、有機的農業の推進、産業廃棄物の削減等があげられていた。

肥料製造能力は、20キログラム袋で10万袋となっているが、今年度は初年度のため、3万袋の製造を見込んでいる。